

毎年やってくる5月の学総体。
一般的には、この関門を最終目標とする選手が最も多いだろう。
競技スポーツを経験したことがない人には「県大会」・・・くらいにしか感じないかもしれない。しかし埼玉の陸上競技で、上位6名にのみ与えられる関東への切符の価値は計り知れない重みがある。学校総数200を越え、実質競争率は各種目数百倍という超難関だ。
いくら自己記録がランキング上位でも、あっという間に落選する様を何回見てきたことだろう。
せめて後輩たちには、力を出し切って試合を終えて欲しい。

2009年5月10日 三日目



幸い日曜日の天候は晴れ。しかしホームストレートは常に2mの向かい風となっている。短距離での記録は望めない状態となった。



春高は前日の400mRでは準決勝で42秒72をマークするも惜敗・・・プラスに入ったのは42秒64までのチームだった・・・あと0.08秒・・・

その悔しさをバネに、今日は200m予選。長谷川が向かい風2mを受け、23秒29で4位。22秒台が出たであろうに、風向きが残念だ。廣井も向かい風を受け5着。ここで主将の小白川が奮起。見事3着に入り準決勝へつないでみせた。

向かえたセミファイナルでは、100mのチャンプと同じ組。しかし立派に走りきって23秒16だった。



これまた - 1 . 3 m という条件下で、2 2 秒台を阻まれた。
レースは参考記録でも良いから、追い風に乗って気持ちよく走りたいものだ。
特に高校の試合は記録が出れば雰囲気ガラリと変わってくる。

過酷な競技

競歩で毎年入賞を続けている春高は、今年もチャレンジを続ける。
8 位入賞のみならず、関東への 3 位を狙って激歩する。

5 月 1 0 日とは考えられない非常識な暑さとなった。
気温は 3 0 度を越えた。公式発表は 3 2 度。しかし競技場は 3 4 度くらいは
あったろう。

櫻井は最初から先頭集団を形成する。
しかし団体はけん制しあっている。
全くペースが上がらないこう着状態が続く。
このままでは 2 4 分以上かかるのでは・・・？

ここで松山高校の二人が仕掛けた。
ぐんぐんペースをあげ、毎回ラップを速くしていった。
櫻井は追うが、歩型チェックを受けた！



暑さから、追う谷古宇と安多も苦しい表情に・・・

トップ3人がゴール・・・櫻井は無念の4位か・・・と、おもいきや「失格」とゴール後に告げられた。・・・ルールとはいえ、悔しい・・・



谷古宇と安多は11位、13位。2年生の二人には一年後の雪辱を期待する。

ゴールする選手がバタバタと倒れていく・・・中には痙攣して動けない選手もいて、あらためてこの競技の厳しさが伝わってきた。30度を越えたら、給水させたほうが良いのではなかろうか・・・と心配にもなった。

2年生の戦い

3000mSCは大久保と、斉藤、渡辺が挑戦する。予選通過は9分45秒前後か・・・昨年は丸山が無念の7位。夢の関東出場はかなわなかった。



大久保は着順で余裕の2着通過。

斉藤は10分49秒。渡辺は故障棄権。

現在の長距離班は2年生が中軸で頑張っている。

特に、1年生ながら5000m15分台を昨年マークした大久保への期待は大きい。春高初の5000m14分台、3000mSC関東出場へ・・・あと1年あるからじっくり成長して欲しい。

男子200m決勝は、100mの1, 2, 3位、400m1位、400mHの1位が激突する非常に面白いレースとなった。





力は拮抗している。
直線に入って、400mの覇者・柳澤選手が抜け出した。



黒須の故障は・・・

嵯峨根さんと応援席で見つめた槍投げであったが、以外にドキドキする内容であった。

やはり全快には程遠く、1投目で8位を決めたら2、3投はパス。







4投目に55mを越え、3位キープ。

全2投に抑えた試合であった。

「昨年の県ランキングトップです」とアナウンスされるも、ほとんど試技をしないので「あれ?」「黒須は?」・・・という声がスタンドから聞こえてきた。

まあ仕方あるまい。

県は通過で身体を痛めない方法をとったのだから。

外野の声は気にせず、今後集中して欲しい。

しかし関東には合わせてくるだろう。自己記録を残さないと、奈良インターハイへの切符は手に入らない。

ちなみに今大会の優勝記録は62m96という好記録。

本番での入賞候補の誕生だ。

もちろん黒須の目標も全国入賞。

そろそろ石田の持つ春高記録も更新しないと・・・と、入学以来期待を背負ってきた。

きっとできる・・・毎年記録更新してきた黒須。

私は信じている。

「県大会」という関門

結局この大会では、常に向かい風のため短距離で好記録は生まれなかった。100mで11秒を切ったのは、無風と、+0.4mのレースのときに一度ずつ。つまり全レースを通して10秒9台は2回しか生まれなかった。200mでは21秒は一度もマークされなかった。しかし決して今年が弱いわけではなく、依然として埼玉は狭き門。800m準決勝は1分59秒でも通過しない。三段跳びは14m17が6位（追い風2m以内）というレベルを保っている。

記録に物足りなく感じるのは、やはり後藤や、埼玉栄の高橋モモコ選手らのイメージが強烈に残っているのだろう。2mほどの向かい風であっても10秒6、21秒台をマークする後藤の強さ・・・いまさらながら思い知ることになった。モモコ選手の11秒7、23秒4というのは驚異の記録なのだ。全国制覇を宿命とする域の選手らは規格が違う。

最終日に、高石が奥岡以来の110mH、400mH関東出場を獲得した。東部地区の様子からしても、大きな成長をとげつつある状態だと確信した。毎試合、自己記録更新して110mHは-2.6mの中で15秒56で走ってみせた。400mHも54秒台目前だ。

高校生は一度勢いがつくと、大化けする。黒須は関東新人の覇者として、高石は一気に記録更新してそれぞれの関東大会を楽しんでほしい。

筆 撮 のもと歯科

